

三一新書 307

霧のなかの歌

第四部 泥 と 花

村 上 信 彦 著

三 一 書 房

霧のなかの歌 第四部

定価 150 円

1961 年 10 月 20 日 第1版発行

著 者 © 村 上 信 彦
1961年

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 永 井 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(201)9581~5番
振替東京84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 307

霧のなかの歌

第四部 泥と花

村上信彦 著

三一書房

第四部

泥
と
花

かいじよう、と間伸びした群長の声がすぐ近くで起こった。その間、靴音はとまり、呼び終わるとまた凍てついた道をゆっくり歩きだす。警報解除のサイレンは三分前に鳴ったのに、伝達する義務だけは忘れずにやっているというふうであった。それが志保に小さな家の密集しているこの町をあらためて思い出させた。だが、どこの家でも反応がなかった。とっくに表戸をしめて寝床に入ったらしく、物音ひとつしなかった。

いまごろ起きているのは自分だけかもしれない。彼女はさっきから、鍵をかけて暗幕を引いた表のドアを背にして土間に立っていたが、われにかえって三尺の出入り口から板張りの床に上がった。空洞じみた局舎は風の吹くたびにみしみし鳴った。どこからとなく風が吹き通るのだ。懐中電燈を照らした。ぐるぐる動く光りの輪のなかに、窓際に押しつけた古い机と椅子、黒いボールの表紙の帳簿類、雨漏りのあとのついた戸棚、その下にはめこんだ黒光りする金庫などが浮んでは消える。それらは一様につめたく、彼女にとってなんの馴染もない他人の顔のようにみえる。

床のつきあたりはさらに一段高くなって、一方は狭い台所に、反対側は二階にのぼる階段に通じている。ふだんでもそこでスリッパをぬぐことになっている。踊り場ほどの広さしかないが、そこからへ郵便局へではなくてじぶんの家になるのである。その階段が真上を走る片隅に屋内防空壕がある。この附近は庭のある家が一軒もないので、壕はどこでも家の中につくっているが、局舎がせまいので机や荷物に占領されない場所といえただけだった。それも申し訳に掘ったものと思えなかった。内部はたった畳一帖ほどで、階段もないから飛びこむしかない。深さもしゃがんで頭がやっと床から隠れる程度で、囲み板も薄く、粗雑に打ちつけたせいだ。継ぎ目に土の肌が見える。せいぜい二人しか入れないので、局員たちのいる昼間は利用することができず、ほとんど蓋をあけたこともない。だが、彼女がひとりでここに寝泊りするようになったとき、父親の雄介がなによりもきびしく注意したのはこの壕のことだった。「夜中にサイレンが鳴ったら、警戒警報だろうとまっさきに蓋をあけるんだよ。ぜったいに不精しちゃいけないよ。なにも持ち出さなくても、局舎が丸焼けになってもかまわないから、身体だけは守るんだ、いいかい？ それを約束してくれなければお前ひとりであんなところにやるわけにはいかないよ」

約束した以上はだれが見ていなくても守る性格だということを雄介は知っていた。だから志保がうなずいたとき、彼の不安は多少かなくなった。たしかに彼女はサイレンが鳴るたびに、

二階から下りてきてまず第一に床板をはずした。約束はそれまでだった。父親は警戒警報で蓋を開けと言っただけなのだ。彼女はこれまで一度もその屋内壕に入ったことがない。

もし父親がその場にいたら、彼女の態度からこのトリックが見破られたかもしれないような出来事が、局舎に住んで三日めに起きた。そのとき雄介は本局に出かけていて、あとに残ったのは局長代理の通信士の尾瀬と二人の女子局員だけだった。サイレンが鳴り、入り口のドアに暗幕を引いて席に戻ってきたとき、いきなり、ひゆるひゆるひゆるッと異様な音がした。それは急激にどこかに吸い込まれた感じで、あとで爆弾だと説明されても、ふしぎに爆音を聞いた記憶はなかったが、その音が消えた瞬間に床板がふわっと浮き上がったかと思うと、局舎全体が浪のように揺れた。やられたっ、と本能的にさげんで尾瀬は椅子からすべり落ち、すばやく床にひれ伏した。二人の娘は机にしがみついたままだったが、顔から血の気が引いていた。そのとき志保は声を立てて笑った。悪意や強がりではなくて、身体に受けた衝撃がじっさいに壮快だったのと、這いつくばった青年の恰好がひどくおかしかったからであつた。あとで爆弾投下だとわかってから現場にいったみると、近くの桜橋停留所のそばの道路がすり鉢形にえぐられ、その広さはひと部屋すっぽり入るほどあつた。鉄かぶとの防護団員がその周囲に杭を打って綱を張り、通行止になっていた。直撃を受ければ局舎も自分たちも跡形なくなっているところである。彼女は笑ったことを思いだし、落ちてから身体を伏せても間に合わないのだということ

で自分の行為を正当化した。

だが空襲に恐怖を感じないことと防空壕の必要とはべつである。そのことを志保はよく知っている。本郷の家の防空壕をつくったのは彼女だった。人手も借りず、汗水流して掘ったのである。防空訓練のときにはだれよりも早く壕に飛びこみ、次の防火活動の体勢をとった。だから父親は注意しただけで十分だと思ったのだが、ここに來てから義務を怠るようになったのは、屋内壕では完全でないからだろうか。最近になって政府は、屋内壕のあるところでもできるだけそとに壕を掘るように指示した。このあたりは細い道路が入り組み、いくつもの路地をはさんで家がぎっしり建っているからそれができない。だが不完全でも無いより有るに越したことはない。では屋内壕としても失格だというのか。ある家では板が買えなかった。または手に入らなかった。そういうところでは冬になっても素掘りに藁を敷いていた。それにくらべれば薄い板の継ぎ目から土くれが落ちてこようとここは合格だった。

志保は壕のふちに立って懐中電燈をつきつけてみる。淡い光りは細長い板張りの壁を這った。いやだ。どうしても入る気がしない。この湿ったくらい害にもぐりこみ、じっとしゃがんで自分の姿を想像しただけでもぞつとする。ただ陰気なばかりではなかった。壕の奥行や深さがなぜか寝棺を連想させるのだった。

ふいに、背中の上しろにひろがった闇が黒い大きな塊りになった感じがした。それは巨大な

蝙蝠こうもりのように羽ばたきした。そして左右から翼を狭め、志保を抱きこみ、じりじり前に押し出してきた。(はいれ、落ちてしまえ、なぜはいらないのだ?)と呟くように脅やかす。志保は抵抗した。あとにさがった。靴音が大きな響きを立てた。それが闇の笑い声にかわった。

(怖いのか? お前ひとりでは入る勇氣がないのか? もっともだ。ここは本郷の家ではない。お前のほかにはだれひとりいやしないのだ。いくら光りを落として探し回っても何も見えはしない。濡れた肩を押しつけてくる男はいないのだよ。ここは墓場だ。これはお前のためにしつらえた寢棺だ。お前は眼を閉じてしずかに身を横たえるのだ)

(生きて埋葬されたくないのよ)と志保はうめいた。

(生きてだって? 埋葬されたくないのだって? それならなぜこんなところに来てきたのだ) 笑い声はますます高くなった。(だがお前はもう半ば埋められているのだ。へ格子ある牢獄などとひやかしたお前が、ひょんなめぐり合わせでその囚人となったのだ。一日じゅう日の射さない窓口にすわって、陰気な他の局員なみに椅子にしばらくつけられている。為替にスタンプを押したり、五銭十銭の切手をちぎったり貼ったり、こまかい数字を帳簿に克明に書きこんだり、前こごみになって弾丸切手の番号を調べたりしている。雑務だ。なんの希望も理想もない完全な雑務のくりかえしだ。いきいきした会話もなく、友人や知人から切り離されている。そして日が暮れば朽ちかけたこの建物にひとり取り残されるのだ。お前の部屋は物置

代わりに使っていた二階の八帖、床の間もなんの装飾もない箱だ。畳は擦り切れ、壁は赤茶けている。往来に面した四枚のガラス戸は汚れて見透しがきかず、ところどころの割れ目は紙で目張りしてある。雨戸がないために長いカーテンを左右から掻き合わせても遮蔽しやへいにならず、伸び上がらなければとどかない電燈はほとんど消したままだ。なんという荒涼だろう！ うるおいのない生活だろう！ それもこれも自業自得という奴だ。両親はお前をこんなところに寝泊りさせるのは最初から反対だった。それをむりやり押し切ったのはお前自身だ。防空要員の世話をあ、男にたのむことに反対しつづけた夜のことを覚えてるか。ばかな意地を張ったものだ。それも、昼間はつとめに出来るつもりだったのが、皮肉にも自分から会社を追ん出て、こういう破目に落ちこんだというわけだ。だが、もう後悔してもおそい。……それとも前言を取り消して、あらためてあ、男に防空要員をみつけてもらうか？ お前がここを脱け出せる道はそれしかないのだからな。

（後悔なんかしないわ。するもんですか。いまの生活だってりっぱにお国に役立つことなんだから！）

（結構だ。まもなく夜が明けければ昭和二十年の正月だ。お前も十九歳に別れを告げて二十になろうとしている。そのすばらしい年越しの記念に、たったひとりで空襲の夜を迎えたというわけだな。紙屑と鼠の匂いのするこの空家で、たったひとりで！ お前はこれから二階に上が

って、つめたい寢床にズボンを穿いたままもぐりこみ、自分で自分を抱きしめるよりしかたがない。そして昨夜も一昨夜もそうだったように、まんじりともせず朝を迎えるのだ。それがお前のえらんだ青春だ……)

(だからどうだっていうの？ 非常時なのよ、私は満足しているのよ！)

志保はさげんだ。声は闇をふるわせた。

一段高い床につまずきながら、いそいで靴の紐をといた。懐中電燈は上衣のポケットにねじこんだ。あたりを取り捲く荒涼さをいま一度照らし出してみるのは耐えがたかった。足さぐりですすみ、急な階段を手をかけてのぼった。獣じみた四つん這いの姿勢を闇がどこまでも追いつけた。

宵から敷き放しの布団は氷のように冷えていた。防空頭巾をとり、上衣をぬぐと、寒さと孤独が一時にせまってきた。闇があざ笑ったようにズボンのままもぐりこむ。横向きになって足をちぢめる。

建てつけのわるい四枚のガラス戸は風に打たれて絶えず音を立てていた。志保は頭から夜具をかむった。自分がいまだどこにいるのかを考えたくなかった。ただ、こうして十九歳が終わるのだと思った。彼女は凍った両手を組み合わせて胸にしっかりと押しつけた。固く膨らんだ乳房が、そこだけが燃えるように熱かった。

2

真砂町の停留所を下りたときはまだ七時すぎで、人通りは疎らだった。街全体が空襲疲れで眠りに沈んでいるようであった。それとも正月元旦のせいかもしれない。志保自身は三時間ほど眠っただけだ。おそすぎる冬の暁方の白っぽい光線がカーテンの隙間から流れこむのに気がつく、朝の雑煮は一緒に祝うから——祝うという言葉を父は使った——と言われたことを思い出して二度寝ができなくなった。寝不足で頭が重かったがすぐに起きた。とにかく悪夢は退散したのだ。その空気が吸いたかった。布団をたたみ、階下におりてせまい炊事場で顔を洗った。あとは靴をはいて、裏口の鍵をかければすむ。その靴も着ている服もゆうべのままである。人々がまだ防空演習用とふだん着や外出着を区別せずにいられたかったところからズボンで通してきた志保は、年が改まってでもスカートにたいする郷愁はぜんぜんない。動きたい服が自分のものになってしまっている。

家ではとくに茶の間の用意ができていた。火鉢にのせた鍋からは香ばしい汁の匂いがあふれ、配給の赤みをおびた餅が盆に盛ってある。食卓には三人分の茶碗と箸がきちんと並び、

平和なころの正月を思い出させる懐しい黒塗りの重箱までがでんと腰をすえている。ただ三つ重ねがただの一重に変わったただけだ。志保は蓋をとって思わず歓声をあげた。彼女の好きなやつがしらや人参やごぼうの煮しめに、黒豆まである。ないものといえはカズノコやきんとんぐらいのものだ。

「これ、みんな配給なの？」

「それもあるし、そうでないものもあるし」と文代は満足そうに言った。「これだけ揃えるのだっていろいろなんだよ。でもね、ぜいたくは言えないから、これでご馳走と思わなくっちゃ！」

「もちろんよ」

「焼け出された連中は餅だって食えないんだからな」

さすがに国民服のまま、火鉢の前にあぐらをかいた雄介が、徳利を手元に引きよせて言った。志保は視線を母親から父親に移してうなずいた。それから笑いだした。

「なんだか変ね」

「どうして」

「だって、私が言いたいようなことを揃って言うんですもの」

「ばかだなあ。なにが変なものか。本当にそうだからそうだと言ってるんだよ」

雄介は一口のんで、また猪口をみたした。

「こんどの空襲は上野方面だそうだ。焼夷弾ですごくやられたらしい。そんなことを考えたら正月もなにもあったもんじゃないんだ。こうしていったって、いつこっちがやられるかもしれない。だが、それだからこそ、親子三人無事に顔を揃えて正月を迎えられたということはめでたいとも言える。そういういみで俺は酒を飲んでるんだよ。晩に延ばしてもいいが、そのころまたポーが鳴っちゃかなわんし、今朝ならゆうべのあとだから、かえって安全だと思ってね」

「なにも弁解しなくてもよござんすよ。この子だって分かっていますから、ねえ！」

いそいで文代が言った。

志保は火鉢から鍋をおろし、網をのせて餅をならべた。

父も母も氣を使っていることがわかった。だがそれは切迫した情勢や罹災した人たちにたいしてではない。つましい煮しめの正月料理と配給の朝酒をたのしむのに言訳などは要らない筈であった。焼け出されたら雑煮も食べられないが、無事でいたから雑煮を食べる。それは偶然の運命であるにしても、いいとかわるいの問題ではない。いわばカラくじなしの抽籤みたいなもので、さきに引くかあとで引くかだ。どうせいずれはやられるのである。それをなにか後ろめたく感じるとすれば、世間ではなくて自分にたいする思惑^{しごく}なのだ。よその不幸な例をつきつけて、「だから私たちは幸福になる権利はない」ときめつける、そんな自分を想像している。

いつのまにそうなったのだろうか。志保はじぶんの過去を探る暇つきになった。

「あらあら焦げてる！」と文代が声をかけた。「さ、あとは私が見るから、もうお膳に座りなさい。あんた、いくつ食べられる？」

「三つぐらい」

「ばかに少ないじゃないか。出しなに何か食べてきたの？」

志保はかぶりをふった。

「私、それほど大食じゃないわ。それにもう胃の大きさがきまってしまったのね、きっと」

「人間は食い溜めがきかないからなあ。だが、この戦争になってから胃病が減ったそうだよ」と、雄介が箸で重箱をつつきながら言った。

「ところが、ふしぎと液体だけは入るものなんだ。おい、あとはついてるんだろうな」

「ええ、でも、お雑煮がおくれますよ」

「まあいいさ。こうしてお前、三人で顔を合わせて正月を迎えるなんて、申訳ないようだがまったくめでたいよ」

またおなじことを言っている！ 志保は腕をのぼして徳利をとりあげ、父の猪口をみたした。視線が合ったとき、「私も一杯、飲んでみようかしら」と呟いた。

雄介の顔に紅味がさし、たちまち酔ったようになった。